

イ 広場状空地の持つ溜まり機能の可能性を最大限発揮させる

(ア) 歩行者動線との整合

人が溜まる空間と歩行空間が明確に分けられ、効率的な利用が図られている。



利用状況によっては、人が溜まる空間と歩行空間が混在する場合もある。



(イ) 休養機能

広場状空地にベンチなどが設けられ、利用者が休憩できる空間を提供している。



まとまった広場状空地が設けられているが、ベンチ等を設けることで、更に利用しやすい空間になり得る。



凡例 青字：望ましい事例 赤字：改善が望まれる事例

(ウ) 緑陰

適切な樹木配置により、緑陰効果が期待できる空間となっている。



休憩スペースに高木を植栽することにより、効果的に緑陰を形成している。



植栽は敷地の辺縁に施されているが、低木ではなく高木により緑陰を充実させることで、更にみどり豊かな空間になり得る。



規模の大きい広場状空地であればこそ、緑陰樹を充実させることで、更に緑豊かな空間になり得る。



(エ) 芝生広場や水景施設の配置

舗装の代わりに芝生広場や水景施設を配することにより、安らぎと潤いのある滞留空間を創出するとともに、ヒートアイランド現象の緩和や雨水浸透効果が期待できる。



凡例 青字：望ましい事例 赤字：改善が望まれる事例

### コラム：「ヒューマンスケールにおける快適なみどり空間の創出」

公開空地は、歩道等の公共空間と建物空間の間領域に位置しており、機能的にも空間的にも双方の空間における活動を結び付けるものです。そのため、公開空地は、歩道や隣接した公園等との一体的な利用ができるようにし、にぎわいの連続性を阻害しない配置やデザインにすることが必要です。

また、樹木、花、水、ベンチ、芸術系モニュメント等を配置することで、憩いの場として積極的に演出し、魅力ある空間とすることが求められています。その際、横断勾配を緩やかにしたり、段差解消や滑りにくい舗装にするなど、車椅子やベビーカーを利用する人にも利用しやすい、ヒューマンスケールを取り入れた快適な緑地空間が重要な要素となってきます。

※ヒューマンスケールとは、人体や運動能力を基準にして空間のサイズを考えることです。



撮影：東京ミッドタウン